

Title	リカルドオの価値論 ( ー )
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.2 (1922. 2) ,p.151(1)- 167(17)
JaLC DOI	10.14991/001.19220201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コール原著 貴島 憲譯

定價二圓五十錢  
送料十二錢

# 労働賃銀論

新解  
解放叢書

資本中心の世の中、何人も無關心なること能はざるは賃銀問題なり。労働者にとりては、實に死活の問題にして、資本家にありては、其の特権の問題なり。此兩者に屬せざる階級ありとすれば、其の人にとりては、生活不安の原因たらざるを得ざるべし。我國の今日に處し、明日に備へんとするものは、本書に來れ!!

コール原著 中目倫義譯  
◇労働組合指針

定價二・五〇  
送料一・二〇

リール原著 柳城義等譯  
◇生理學上より労働者問題

定價二・五〇  
送料一・二〇

ロイド原著 荒畑寒村譯  
◇労働組合論

定價二・五〇  
送料一・二〇

法學博士堀江輝一著  
◇労働問題の現在及將來

定價三・二〇  
送料一・二〇

東京大橋町 大イ 東京大橋町 大イ 東京大橋町 大イ  
振替 振替 振替  
八六三三 八六三三 八六三三  
五五一七 五五一七 五五一七

三田學會雜誌 第十六卷 第二號

論 說

リカルドオの價值論 (一)

小 泉 信 三

(一)

Adam Smith は時々現實の需要供給に由りて騰落する貨物の市場價格の外に、その自然價格なるものを究め、市場價格は或は自然價格以上に昇り、或は其以下に降ることありと雖も、長時に亘りて見るときは、前者は必ず後者に歸着せんとするものなる事を説き、而して此自然價格は一貨物の生産販賣に参加せる土地、労働及び資本に對する、自然率の地代賃銀及び利潤を以て構成せらるゝものなりと謂へり。

自然價格の何を以て構成せらるゝかに就ては Ricardo は Smith と所見を異にしたりと雖も、市場價格は自然價格の支配を受け、究竟之に歸着せんとするの約束あるものなる事は、彼れの同じく認むるところなり。而して彼れは貨物の交換價值はその自然價格の義に外ならざる事を明言せり (Principles, Ch. IV)。即ち Ricardo は其價值論に由て、貨物の價格は究竟何に由て支配せらるゝかの理法を明にせんと志したるものなり。市場價格の背後に自然價格なるものありて、之を支配すとの説は Smith の創唱に非ず。凡そ一貨物がその品質又はその生産に要する費用に變動なきに拘らず、需要供給と概稱せらるゝ種々の事情の爲めに、市場に於ける其價格の絶えず騰落を免れざるの事實は、恐らく容易に人をして、此の外部の事情に由て定めらるゝ謂はゞ可變的偶然的なる價格の外、別に物に固有の不變的必然的なる價值又は價格ありて、之と相對する事を想ふに到らしむるならん。Smith に於ける市場價格と自然價格との對立は、Smith 以前の經濟論には、或は同じく自然價格と市場價格、或は内在價值 (intrinsic value) と外附價值 (extrinsic value) との對立として現はる。今 Ricardo の價值論を論ずるに方りて、先づこの自然價格と市場價格又は

内在價值と外附價值との關係に關する思想の沿革を知るとは無用に非ずと信ず。先づ舉ぐべきは William Petty の説ならん。Petty は等量勞働の生産物は相互に等價となし、その一を以て他の自然的價格となすものなり。彼れは其著 A Treatise of Taxes and Contributions, 1662 の中に地代の性質を説明して、一定面積耕地の收穫より耕作費を控除せる餘剰は、其土地に對する其年の自然的地代若しくは眞實地代を構成する事を謂へる後、此の自然的地代は果して貨幣幾許に相當するかの間を起し、之に答へて、別に一人ありて、耕作に費やすと同一時間を費やして銀の採掘精鍊運搬に従事し、斯くして舉げ得たる銀産額より一切の費用を控除せる殘額はなりと謂へり。「一方の者の銀と他方の者の穀物とは、之を同價と評定せざるべからず。假に一方は二十馬、他方は二十ブッシェルなりとせば、當然此穀物一ブッシェルの價格は銀一馬の價格たるべし」 (The Economic Writings of Sir W. Petty, edited by C. H. Hull, 1899 p. 43) 「人若し一ブッシェルの穀物を作ると同時に、銀一馬を秘露國の地中より倫敦に輸致することを得ば、一は他の自然價格 natural price なり。然るに今採掘一層容易なる新鑛の爲めに、能く從來一馬を得るに要したると同じ勞を以

て銀二匁を得とせば、穀物は、他の事情にして變らざる限り、前に一ブッシェル五志なりしもの十志たるを相當とすべし。(pp. 50-51) 即ち貨物の價值はその生産に要する労働量の増減と共に昇降す、穀物は、一人が十人分の穀物を生産するとき、その僅かに六人分を生産するに過ぎざるより、低廉なり。(p. 50) 然れども茲に Petty が論ずるところは貨物の自然價格にして、彼れは現實の貨物交換比率が必しも常に必要労働量のみの定むるところにあらずして、投下労働量は更に他の複雑なる事情を俟て決せらるゝ、實際價格の基礎たるに過ぎざる事を認めたり。故に彼れは前記自然地代の貨幣幾許に相當すべきかを説明したる後、是を以て「價值の平均並に權衡の基礎なり」とし、此上に築かるゝ上部結構と實際とは、猶ほ多くの變化と錯綜とあることを告白すと記せり(p. 44)。彼れは又自然的廉不廉 *natural dearness and cheapness* なるものを舉げて政治的低廉 *political cheapness* なるものと相對峙せしめたり。自然的價格の實現を妨げて、政治的價格(現實價格)を決定する諸原因としては Petty 或は生産者又は企業家の全出費の、價格に由て補償せられざる可からざる事、土地產物の價格の、生産地附近に居住する消費者數に依り、國民の社會

的自然的宗教的意見(*civil, natural and religious opinions*)に依り、その生活の華美なると質素なるとに由りて影響せらるゝ事、又或は貨物に代用物あると否と、新奇の風、長上の好む所に倣ふこと等の物の價格を増減することあるを挙げたり。(R. Zuckerkandl, *zur Theorie des Preises*, 1889 S. 231) Petty はまた別に寶石の價を論じて、その廉不廉を決するものに、寶石自身に存する内在的(*intinsic*)原因と外附的(*extrinsic*)又は偶生的(*contingent*)原因とあることを述べたり。彼れが内在的原因として數ふるところは、重量、大小、色澤、瑕疵の有無、及び細工の五にして、偶生的原因としては、(一)原產地に於ける購買の禁止、(二)印度に於ける商人が其資金を金剛石以外の商品に投下することを利となし、從て之を輸入せざる場合、(三)戰亂の破裂を恐れてその買占めらるゝ場合、及び(四)盛裝して場に臨むもの多き大貴族の結婚式近ける場合に、その高價となる事を挙げたり。(The Dialogue of Diamonds, The Economic Writings pp. 625-6) 茲に彼れが價值決定の内在的原因として挙ぐるところは、直ちに投下労働量の大小に歸すべきものなりや否や明かならずと雖も、貨物の實際交換比率が、投下せられたる比較的労働量と比例することはその所謂偶發的原因の爲めに妨げらる



ゝものなるとは明白なり。而して此にPettyが偶發的原因として擧ぐるところは、何れも市場に於ける需要供給の動搖を來たさしむる原因なるを以て、彼れの意は、貨物には市場に於ける時々現實の價格の外に、是等一時的偶然的動搖に左右せられざる必然永續的の價格あるものとなし、その決定原因を生産に要する相對的勞働量に求めたりと解すべきものならん。(vgl. Zuckerkandl, S. 231-2—H. R. Sewall, The Theory of Value before A. Smith, 1901—W. Liebknecht, Geschichte der Wertheorie in England, 1902, S. 3-5)

時々の市場價格の外に必然的標準的價格ありて、之を支配すとの思想は、Richard Cantillonの内在價值(valeur intrinsèque)の説にも明かに現はる。之より先き内在價值外附價值の語は、素と教會法學者及び民法學者が貨幣の品質量目を bonitas intrinseca との稱價を bonitas extrinseca と稱したるを繼承せるものにして、A Discourse of Coin and Coinage 1623 pub. in 1655 の著者 Rice Vaughan も、凡そ貨幣の素材に基づく普遍的價值及びその地方的法定價值との意義に此二語を用ゐたりしが、漸くにして intrinsic value 又は natural intrinsic value は、物の欲望を満たす力、又は固有の質の意義

に用ゐられて、その交換力たる extrinsic value と相對せしめらるゝに至れり。即ち Locke は物の内在的自然的價值は、その人生の必要を満たし、又は便益に貢獻するの適否を以て定まるものとなし、貨物の販賣(市場)價格 marketable value の變動は……何等貨物の内在價值又は性質の變更にはあらずして、其貨物の他物に對する或比例の變更なり」と謂ひ、又例へば An Essay on Money, Bullion and Foreign Exchange, London 1718 の匿名著者の如きも「それ自體最も有用愉快の性質を具備するものは、最大の内在價值を有す。土地、水、光線は世の最も普通のものなりと雖ども、最大の内在價值を有するものなり」と記せるなり。(Zuckerkandl S. 13-15, Sewall, p. 51. Liebknecht, S. 3)然るにCantillonに至つて此内在價值なる語は Smith に於ける自然價格の如く、市場價格の變動の中心、又はその究竟の支配者の意義に用ゐらるゝに至れり。彼れはその Essai sur la Nature du Commerce en Général 1755-Reprinted for Harvard University, Boston, 1892 中に於て、物の生産に投せらるゝ土地生産物の量並びに勞働の量及び質がその價格を構成するの理を種々の例證を以て説明したる後、之を概括して曰く、「是等の歸納と例證とに由り、一物の内在價格又は内在價值 le prix et valeur intrinsèque

queはその生産に入る土地及び勞働の量の尺度たること(土地の豊度及び生産物量並に勞働の性質を斟酌するものとして)了解せられたるべしと信ず。此の内在價格又は内在價值は必しも常に市場に於ける現實の價格となつて現はるゝものにあらずして、後者は前者の或は以上或は以下に離るゝことあるものなりと雖も、Cantillonの見るところに従へば、正常なる狀態の下に於ては、二者一致せんとするものなり。而して一物の市場に於ける現實の價格をして、内在價值の上下に逸脱せしむる原因は普通需要供給の名の下に概括せらるゝ諸原因なり。乃ち曰く、現に此の内在價值を有する幾多の物は、屢々市場に於て此價值に従つて賣れざることもあり。これ人の趣味氣分及びその行ふべき消費に由て然るものなり。例へば一大貴族が、其庭苑に渠を通じ臺を築く爲めに巨額の費用を投じたりとせば、其内在價值は土地と勞働とに比例すべしと雖も、其實際の價格は必しも常に此比例に従ふものにあらず。是を賣却するに當りては、或は其の費やしたところの半ばを償ふ能はざる事あるべく、又之を買はんと欲するもの多ければ、内在價值の倍額をも收むることあるべし。又一國農産物の收穫が年々の消費必要量以上に上ると

きは農産物過剰にして買手以上の賣手あるを以て市場に於ける小麥の價格は必然内在價值又は價格以下に降るべく、反對に農民が消費の必要量以下の小麥を作るときは、買手は賣手より多かるべく、市場に於ける小麥の價格は内在價值以上に騰貴すべし。物の内在價值には決して變動あることなし。然れども一國に於て商品及び食物の生産をその消費に比例せしむることの不可能は、市場價格の日々の變動、不斷の騰落を惹起す。然りと雖も秩序宜しきを得たる社會に於ては、消費の充分不變均等なる食物及び商品の市價は甚しくその内在價值より遠ざかることなし」(pp. 33-39)。而して貴金屬の價值も亦同一の理に由て支配せらるゝ事を説きては「金屬の眞實内在の價值は凡ての物のそれと同じく、その生産に必要な土地と勞働とに比例すと謂へるなり (p. 127)」。Cantillonは此處に歩を止めずして、更にPetyも嘗て試みたるが如く、幾許の土地は幾許の勞働と等價なるかを決定せんとす。曰く、土地は一切の食物及び商品の素材、勞働はその形式なり。而して勞働するものは、必然土地生産物に依て生活せざる可からざるを以て、勞働の價值と、土地生産物の價值との關係は之を發見し得るものゝ如しと。乃ち彼れは先づ最

卑賤なる奴隸の勞働を以て論を起して、此種の成人奴隸一人の勞働は、該奴隸自身並に二人の小兒を勞働年齡に到達する迄養ふ爲めに、其所有者が充用せざる可からざる土地量の價值と一致すと謂ひ (p. 44)。次で各種各階級の勞働者の必要及び習性を論じたる後、是等の歸納に由りて、人は日傭勞働者の勞働の價值は土地生産物と關係あること、及び一物の内在價值はその生産に充當せらるゝ土地量と生産に入る勞働量、即ち又更にその生産物が其處に勞働せる者に歸せらるゝところの土地量とに由て測定し得るものなることを認むと記せり (p. 53)。即ち彼れは土地生産物の價值と土地其物の價值とを同一視して、最下級勞働者の勞働の價值は、該勞働者と其家族とを養ふに足る土地量の價值に等しと論結するものなり。

Cantillon と、又從て William Petty とも通ずるところ多きは William Harris が *An Essay upon Money and Coins*. Part I, 1757 の中に述ぶるところの説なり。Harris も亦 Cantillon 等と共に「土地と勞働とは相合して一切の富の源泉たる事」を説き「土地の力に俟たずんば生活を維持すること能はず、又勞働なくんば甚だ貧寒不快適なる生活のみあるべし。故に富 *wealth or riches* は、或は土地の適宜性か、又は土地と勞働との生産物

かを以て成る」と謂へり。(A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts on Money, from the *Originals of Vaughan, Cotton, Petty, Lowndes, Newton, Prior, Harris and Others*. Printed for the *Political Economy Club*, 1856, pp. 347-8) 而して彼れも亦市場に於ける現實の交換比率以外に物の内在價值あることを認め、之れが決定原因を該貨物に費やさるゝ土地及び勞働に求めんとしたり。而して内在價值なる語が最早 Locke の時代に於けると異なり、物の欲望充足力其者の意義に用ゐられざる事は、左の引用に由て之を窺ふべし。曰く「一般に物はその人間の必要を満たす上に於ける眞の用に應じては評價せられずして、寧ろ之を生産するに必要な土地勞働及び熟練に比例して評價せらる」と。而して貨物の内在價值は専ら之に由て決定せられ、而して内在價值は貨物間の交換比率を支配するものなることは、物又は貨物相互の交換は略ぼ此比例に於てせられ、大多數の物の内在價值が主として評定せらるゝは上記の尺度に由るものなり」と謂ふに徴して知るべし (ibid. p. 350)。斯く Harris は貨物内在價值は生産に要する土地勞働及び熟練に由て決定せらるゝと云ふも、就中重きを勞働に措けり。即ち謂へらく、一切物若しくは一切貨物は、土地と勞働との産物な

るを以て、貨物の様々なる價值は此二者に依て調節せらる。「然れども大多數の生産に於て勞働は最も重きを占むるを以て、勞働の價值は一切貨物の價值を左右する主要標準と見るべきものなり。……人々の様々なる必要と欲望とは、彼等を驅つて、自己所有の貨物を、その換えて得んと欲する物に投せられたる勞働と熟練とに比例せる一定率に於て賣ることを餘義なからしむ。」(ibid. p. 352) 但し貨物の内在價值はその相互の交換を支配すと云ふも、市場に於ける個々貨物の現實の價格が必しも常にその内在價值と一致するものにあらざることは Harris の明かに認むるところなり。乃ち曰く、特定貨物に對する急速若しくは緩慢なる需要は、その内在價值若しくは原費に何等の變動生ぜざるも、屢々其價格を騰貴若しくは下落せしむべし。人は常に他人の嗜好出來心若しくは必要に應せんとして其機を待てるものなるを以てなり。又買手の賣手に對する比例若しくは特定物に對する需要のその量に對する關係は常に市場に於て影響を有すべし」と(p. 350)。然れども彼れの見るところを以てすれば、貨物の價格は結局その内在價值に一致せんとするの傾きを有するものなり。而して此兩者を一致せしむる動力は自由競争な

り。即ち人若し市場に順應することを肯せざるときは、投せられたる勞働量に比例して交換を行はざるときはの義、彼等の商品は賣れずしてその手中に留まるべく、又最初に、勞働熟練及び一切の危險を考量して、一産業が他のものよりも有利なるときは、其産業に参加するもの増加すべく、その相互の競争に於て價格を引下げ、遂に其の大なる利潤を他と同一率まで下降せしむるに至るべし。勞働の價值を土地に約元せんとしたる Petty 及び Cantillon の嘗試も亦 Harris の倣ひ試みるころにして、其の到達せる結論は Cantillon の夫れと軌を一にし、普通勞働者の勞働を以て普通勞働者を養ふに足る土地量と同價となすものなり。曰く、「……勞働者の生活維持の用に充てらるゝ土地量は彼れの傭賃となり、此傭賃は又再び土地の價值となる。固より土地一エカアの一定勞働量に對する比例は、全世界を通じて一ならず、之は常に土地の肥瘠の同じからざるより生ずるのみならず、又農民の生活狀態の處に由りて異なるより生ず。蓋し貧民は、その衆多なるよりして土地產物の主なる消費者なるが故に、勞働の低廉なところ、即ち勞働者の生活の甚だ貧寒なるところは、土地も亦低廉なるべきを以てなり。従て土地の價格は常に勞働の價



格に由て影響せらるゝと。(p. 353)

上記諸家の説と多少相觸るゝところあるものは Sir James Steuart が *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, 1767 の諸節に述ぶる説ならん。彼れに従へば、一貨物の生産費はその眞價 (real value) を決定し、市場に於ける賣價の眞價を超過する部分は利潤を構成す。而して價格は此眞價以下に降ること能はずと謂ふを以て、Steuart にありては貨物の生産費はその價格の歸向中心にあらずして其動搖の最低限を定むるものと謂ふべし。曰く (Bk II Ch. IV) 貨物の價格中には全く相異なる二物ありて存す。「貨物の眞價 real value 及び賣却に際しての利潤 (profit upon alienation) はなり」と。眞價を構成する要素にあり、(一) 一貨物の生産に費やさるゝ平均勞働量、即ち Steuart の語を以て云へば、一人が一日一週一月内に該貨物の幾許を造り得るか、(二) 勞働者の生活費及びその生産要具を供給する爲めの必要費用、(三) 原料の價值はなり。「是等三個條を知れば製作物の價格は決定せらる。價格は此等三者の總額以下即ち眞價以下なること能はず。是以上のは悉く製造家の利潤たり。是は常に需要に比例し、從て事情に應じて動搖すべし。」而して生産と需

要即ち供給せられたる貨物の數量と需要若しくは欲望せられたる數量とが相均衡するときは、價格は貨物製作の實費に製造家及び商人に對する少許の利潤を加へたるものと適當の比例を保つなり (Bk II Ch. X)。彼れは別にその貨幣を論ずる章 (Bk III Ch. I) に於て物の價值の由て決定せらるゝ原因を擧ぐ。(一) 評價せらるべきものゝ多少、(二) 是に對する人間の需要、(三) 需要者間に於ける競争、(四) 需要者の範圍及び能力はなり。然れども茲に謂ふところの價值は前に所謂貨物の眞價にはあらずして寧ろ價格なり。而して右記四個の原因に由りて決定せらるゝ價值は決して生産費に由て定められたる物の眞價以下に下降す可からざるの理なきを以て、物の眞價はその價格の最低限を決定すとの説は承認し易からざるなり。彼れの、需要の單一 (simple) と複合 (compound) と、その強弱と大小とを分ち、又單純競争と複雑競争とを區別して、其上に立てたる價格理論は、彼れの時代に取りては甚だ進歩せる學說なり (Zuckerlandl) と雖も今説かず。茲には市場價格の歸向中心としての自然價格に關して Smith 及び Ricard の學説を論ずるに方り、先づ其萌芽と見るべきものを Smith 以前の文献に尋ね、其大略を記して本論の準備をなさんとする

のみ。

附記 Zuckerkandl (S. 11 ff.) の記すが如く、Smith 以前の英吉利經濟論に於ては、value, worth, price の語は嚴密に區別せらるゝ事なく隨意併用せられたるが如し。一財の價值 (value) は之と交換せらるゝ他財の量に現はるゝその購買力を現はし、その價格 (price) は之と交換せらるゝ對價物量を指すことを常としたりと雖も、此區別も必しも常に嚴守せられざりしは、例へば Petty が「Amsterdam に於ける建物の價值 value は巴里の夫れの半ばなるべし」佛蘭西より輸出せられたる貨物の價值 value「然れども和蘭より英吉利へ輸出せられたるものは三百磅の價值 worth あり。(Pol. Arithm.)」然れども次の問題は此穀物又は地代は英國貨幣幾許の價值 worth あるか「(Taxes & Contribution) と記し、之と相並んで「貨物の價格」「土地の價格」「穀物の價格」と云ひ、又前記「此穀物又は地代は英國貨幣幾許の價值あるか」の問に對して、「……一方の銀は他方の穀物と同價值 equal value と評定せざる可からず……故に當然此穀物一ブシエルの價格 price は銀一匁なり」世界は物を金及び銀にて測れども主として後者に由りてす。……而して若し品位最目同一と認められたる銀

にして其價格 price 昇降し、又一個所に於て他に於けるよりも價值あり more worth ……又それに由て評價せられたる valued 諸物に對する比例に於て相違せんか云々」(Taxes etc.) の句あるを以て知るべし。同様の混用は Locke に於ても之を見る。即ち「一物の價值 value を正しく評價せんとするものは、其數量を、その販路に對する比例に於て考察せざる可からず。蓋し價格を左右するものは是事のみなるを以てなり。」其內在價值 intrinsic worth に於て考ふれば、銀一匁は常に他の銀一匁と同價值 equal value なること確實なり……然れどもそれは同時に世界の諸處に於て同價值 same value ならずして、その商業に比して最も貨幣少なき處に於て最も價值 most worth あり」(Consequence of Lowering of Interest)「一物の價值若しくは價格 value or price は單にその或他の物に對する關係的のものに過ぎざれば」(Of Raising Our Coin) 云々等の如し。